

聖書に親しむ

2007年聖書週間（11月18～25日）

テーマ：喜び生きよう「初めに言が^{ことば}あった」（ヨハネ1・1参照）

2007.11.18
カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL 03-5632-4445 FAX 03-5632-4465
郵便振替 00160-1-88026 (宗)カトリック中央協議会データ口

巻頭言

東京教区司教 岡田 武夫

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された —第1回福音宣教推進全国会議の開催20周年を迎えて—

第1回福音宣教推進全国会議（NICE-1）が開催されて20周年を迎えました。

この全国会議は「遊離」ということ、つまり生活と信仰の遊離、社会と教会の間の遊離ということを描き、遊離を克服するためにどうしたらよいか、を探求するために開催された会議です。

参加者は司教団に「答申」を提出しましたが、それは「日本の社会とともに歩む教会」「生活を通して育てられる信仰」「福音宣教をする小教区」の3本の柱からなっていました。「生活を通して育てられる信仰」では「分かち合い」によって信仰を育てることを提唱しています。

いまこの提案を読み返してみても、不思議に思われるのは、柱Ⅱの提案1の「分かち合い」のなかに「聖書」という言葉が見当たらないということです。現代の教会では聖書の分かち合いが奨励され普及しつつあると思えます。ところがNICE-1ではそれが見つからない、これは何故だろうか、と考え込まざるを得ません。

それはもしかしたら、NICE-1が、「生活から信仰を見直す」方向を選択したことに関係があるかもしれません。NICE-1は、現実の種々の問題をまず取り上げ、その問題に対して福音はどんな光を当ててくれるのか、を見ていこうとしたのだと思います。聖書の分かち合いであれば、まず聖書を読み、神のことば、キリストの福音が自分たちの生活に何を言っているのか、どのような光、励まし、力となっているのか、をともに見ようとします。これは逆の方向です。

生活と社会の現実を直視することは大切ですが、それで終わってはならないわけです。それはそうとして、わたしたちは聖書の世界に入り、そこから生活と社会の現実を見ていくことが大切です。

答申を受けた司教団は『ともに喜びをもって生きよう』を発表し、「信仰生活は、私たちとともにいてくださる神のみ前で、人々とともに、キリストの福音を信じる『喜び』に生きること」と言いました。

神が創造されたこの世界と人間、それは「極めて良かった」（創世記1・31）のです。しかし人類の歴史は悲惨と汚辱にまみれ、現代世界も不正と暴力、矛盾と残酷さのあふれる世界です。この現実には神は何を言ってくくださるのでしょうか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3・16）

神の愛を信じ伝えることが教会の使命です。神が救いの歴史のなかで、どのように、あがないと創造の働きを展開されたかを学ぶためには、聖書に学ぶしかありません。日々、神のことばに触れ、神のことばに生かされて歩んで行きたいと思えます。



今年のテーマ

喜び生きよう「初めに^{ことば}言があった」(ヨハネ1・1参照)

長崎教区司祭 久志 利津男

正直に言いますと、かつては聖書に全く関心はなく、当然、手にとって読むとか、理解しよう、まして生活に活かそうなんて考えてもみませんでした。しかし、そんな私でも人の子。一時期、聖書をかじりたくなったのです。聖書をむさぼり読みながら、「聖書は神のことばだから間違いはないはずなのに、この表現はおかしいのではないか！ このことば遣いは問題では？」と素朴な疑問を持ったものです。そんなある日、大神学校の黙想会で指導司祭が、「聖書は、人は何のために生まれ、そしてどのようにして生きていくのかという、この『生きる』ことについて書き記したものです」とわかりやすく話す内容に、頭から拒絶していた聖書理解が身近なものとして受け入れる思いになったあのときのことを今でもはっきりと覚えています。

「初めに言があった」(ヨハネ1・1)「人はパンだけで生きるものではない。神の言葉で生きる」(マタイ4・4参照)など、確かに聖書は今ある現実のことに目を向けさせ、そして訴えかけるのです。1549年8月、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、多くの困難を伴いながらも喜びと希望のうちに神のことばを告げ知らせました。それから4世紀半、今から26年前に教皇ヨハネ・パウロ二世も神のことばを携えて初めて日本を訪れました。二人が置かれた状況の違いはあれ、「生きる」ことの意義とその価値を大々的に言い表したことににおいては同じであったと言えます。いみじくも去年はザビエル生誕500年、教皇訪日25年でした。

節目と言えば、今年は「ともに喜びをもって生きよう」というテーマのもと第1回福音宣教推進全国会議(以下、「NICE-1」)が行われて20年を迎えます。NICE-1は教皇訪日を機に日本司教団が日本における福音宣教のあり方を全国規模で話し合い、具体的に行動していこうという画期的な大会でした。このテーマの中に提示された三つの課題(日本の社会とともに歩む教会、生活を通して育てられる信仰、福音宣教をする小教区)の精神が、各現場でどのように具体化されてきたかを振り返ることが必要である、との声が今日にわかに大きくなっています。そういった意味ではあの大会を一過性にするのではなく、「振り返り」によって現実に関心を向け、将来を見据えるということにおいて重要な節目ではないでしょうか。やはりここでも「生きる」ということが最大のテーマとして見て取れますが、しかし忘れてはならないことはその基礎であり、解決の糸口である神のことばたる聖書です。

来年10月には「教会と宣教における神のことば」というテーマで第12回シノドス(世界代表司教会議)が開催されます。テーマの選択について、「2005年10月2日から23日まで開催された『聖体—教会生活と宣教の源泉と頂点』に関するシノドスの後、自然に『教会生活と宣教における神のことば』に注意が向けられることになりました。それは、パンとみことばによる唯一の食卓の意味をより完全に検討するためです」(提題解説《リネアメンタ》序論)と説明して、食卓に置かれた生きるために必要なパン(聖体)とことば(聖書)の一体性を強調します。

ところでこの節目の年をより深め強めてくれるのが、日本の教会主導で運動してきた「ペトロ岐部と187殉教者」の列福の決定と日本で初となる列福式です。日本教会の誇りとも言える世界に比類ない殉教の歴史を見るときに、殉教者がその命を懸けてまでも「ともに喜びをもって生きよう」とした精神が現代の教会の生き方に、さらにはこの社会に大きな実りをもたらすと確信しています。

このようにザビエルのこと、教皇のこと、NICE-1のこと、そしてシノドスのこと、さらには殉教者列福のこと、これら一連の流れは「生きよう」、それも「ともに喜びをもって」という神のことばにすべて合い通じる“時のしるし”なのかもしれません。

生きるための術(すべ)と生きる上での教訓を提示する、そして何よりも人を生かす神のことばに注目したいと思います。「初めに言があった…」(ヨハネ1・1)という神の人間に対する愛の姿を念頭に置きながら。



みことばを深める

分かち合いの手引き ～みことばをともに味わうために～

東京教区補佐司教 幸田 和生

東京教区のウェブサイトでお勧めしている小グループのための「聖書の集い」について紹介します。詳しくは <http://www.tokyo.catholic.jp/text/diocese/sgroup.htm> をご覧ください。

聖書の集いの目的

「聖書の集い」は、福音を一緒に読み、一緒に味わい、ともに祈る集まりです。聖書の集いは次のことを目指しています。

1. 毎回の集いの中では、自分たちの現実の中に神（イエス）がともにいてくださることを確かめ合うこと。
2. 月から数年の単位で見たときには、ともに信仰の道を歩む仲間作り。
3. もっと長い目で見たときには、一人ひとりが霊的に成長していくこと。

「福音のヒント」

この「聖書の集い」では毎回、次の日曜日のミサの福音朗読の箇所を読むことになっています。司祭やシスターなど特別な指導者がいなくてもいいように、毎回の福音の箇所について簡単に解説した「福音のヒント」が準備されているので、これを使います。「聖書の集い」では、誰かが教える人ではありません。とは言え、ただ個人個人の感じ方だけで福音について語り合うことにも不安があるかもしれません。「福音のヒント」には必要最小限の解説と、生活の中で聖書からの光を受け取るためのヒントが書かれています。これは上記ウェブサイトから取り出すことができます。

「聖書の集い」の進め方

1. 短い自己紹介（皆が知り合っている場合は必要ありません）
2. はじめの祈り
3. 次の日曜日のミサの福音の箇所をゆっくり読む。
4. 「福音のヒント」を読む。
5. もう一度、福音の同じ箇所を読む。
6. 3～5分ぐらい、各自が沈黙のうちに福音の言葉を味わう。
7. 心に響いたことを分かち合う。
8. 神が今日のわたしたちに何を呼びかけておられるかを受け取るために、しばらく沈黙のうちに祈る。
9. 参加者が自由に自分のことばで祈りをささげる。最後に一緒に主の祈りを唱える。
10. 結びのことば

気をつけるべきこと

「安心」ということは分かち合いが成り立つための前提条件です。参加者が安心して分かち合いをすることができるために、次の点に注意します。

1. 集いの場で聞いたことを他の場で話さない
2. 支配するのは神の霊（だれかがボスにならない）
3. 相手を批判しない、議論しない



良書のすすめと読み方

- ①『聖パウロ—神から生まれた月足らずの子』 アラン・ドゥコー著／奈須瑛子訳 2006年 女子パウロ会 4200円(税込)
- ②『聖パウロ—その心の遍歴』 和田幹男著 1996年 女子パウロ会 3150円(税込)
- ③『パウロの信仰告白』 カルロ・マリア・マルティニ著／今道瑤子訳 1990年 女子パウロ会 1223円(税込)
- ④『キリストの使徒パウロ』 脇田晶子著／岩淵慶造絵 2003年 女子パウロ会 1260円(税込)

今年6月28日「使徒聖ペトロと聖パウロの祭日」前夜、教皇ベネディクト十六世は、聖パウロの生誕およそ2000年を記念して、2008年6月28日から2009年6月29日までの一年間を「聖パウロ年」とすることを発表され(カトリック新聞2007年7月8日号参照)、そのために、今年から準備をしていくよう、全信徒に呼びかけられました。「初代教会と同じく、現代も、聖パウロのような、キリストのために犠牲をいとわない使徒、殉教者が必要とされている」と。

今年の聖書週間には、とくに聖パウロを知り、異邦人世界への熱烈な使徒であった彼から、混迷するこの日本の社会にキリストを知らせるための情熱を受け継いでいくため、いくつか聖パウロに関する本をご紹介しますと思います。聖パウロについては、カトリック、プロテスタントを問わず、日本でも専門的な研究書をはじめ、たくさんの本が出版されています。しかし、ここでは、わたしたちが出版にかかわった比較的やさしい何冊かを紹介させていただきます。

①『聖パウロ—神から生まれた月足らずの子』

アカデミー・フランセーズの歴史家である著者がパウロの足跡を追って、ユダヤ、ギリシア、ローマの精神世界を縦横に駆けめぐるユニークな評伝。ユダヤ主義キリスト者との軋轢に悩むパウロの苦しみが痛いほどわかり、異邦人信徒としては感謝にたえない気持ちになる。

②『聖パウロ—その心の遍歴』

著者がまえがきで言っているように、「新約聖書を読むためにも、発足した当時のキリスト教を知るためにも、パウロを学ぶ意義の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。」聖書学者、和田神父が憑かれたようにパウロを追った長年の結実。多くの写真と地図も入り、1996年の発行で、いまは4版を重ねている。

③『パウロの信仰告白』

著者が教区の司祭たちの黙想会でおこなった一連の講話。使徒言行録とパウロの手紙をもとに、使徒の生涯を織りなす光と闇のドラマを浮き彫りにし、追体験させながら、読者を、あわれみの神、いつくしみの神との新たな出会いに導いてくれる。1990年の発行だが、十数年をへて、なお新鮮な感動を呼ぶ。

④『キリストの使徒パウロ』

小学校高学年くらいから、だれにでもわかるように、この歴史上の偉大な人物を知らせようとするもの。聖書と聖伝に忠実に、正確に、たんと構成している点が好ましい。大人でも、初心者には勧めたいもの。
(女子パウロ会単行本編集部)

編集後記

第1回福音宣教推進全国会議より20年。「ともに喜びをもって生きる」とは、「聖書に生きる」ことであり、「初めに言があった」喜びを生きること。そして、福音宣教は「ともに、みことばを生きる喜びを、分かち合う」生活だと思い、今年の「聖書に親しむ」を作成してみました。その意向をこころよく受け取り執筆してくださった岡田大司教様、「聖書の集い」をわかりやすくご紹介くださった幸田司教様、来年開催が予定されているシノドス、「ペトロ岐部と187殉教者」列福等、多方面から神のことばである聖書に関連づけてテーマの解説をしてくださった久志神父様、教皇ベネディクト十六世が発表した「聖パウロ年」にふさわしい本をご紹介くださった女子パウロ会編集部の皆様、ポスターの写真を提供してくださった関谷神父様には、心より感謝を申し上げます。今年も多くの方のご協力をいただきまして「聖書に親しむ」を発行することができました。みことばどおり、希望と喜びに満ちた1年でありますようお願いしております。

献金のお願

この『聖書に親しむ』は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のために些少でもご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願い致します。

振込先：郵便振替 00160-1-880256 (宗)カトリック中央協議会データ口